

あ の

言

松本市出身 国際教養大学長

なかじま

みね お

中嶋

嶺雄

さん (70)



小怨を顧みず

小怨(しょうえん)を顧みず。言葉の由来は十世紀の中国にさかのぼります。五つの王朝が興亡した五代時代に宰相として生き抜いた馮道(ふうどう)が残した言葉とされています。人間関係を築く根本として、小さな恨みごとにこだわらないという生き方は大切なことだと思えます。この言葉の前は「天下を治める者は」となっていて、特にリーダーには貴重な教えるべきでしょう。

私も人生のいろいろな局面で思い出してきました。大学紛争のころ、私は東京外語大で教授会代表委員として「入試粉碎」「大学解体」を叫ぶ学生たちと対決し、それに同調する教官たちとの人間関係に苦心しました。研究室は荒らされ火を付けられるほどでしたが、学生のために何が必要かを考え、入試を断行する姿勢を買いました。

台湾の総統だった李登輝さんとは副総統時代の一九八〇年代から親しい付き合いをさせていたと思います。総統になっても、考え方の違う国民党古参幹部に囲まれていた一九九一年は特に大変な苦勞をされました。台湾でお会いした際、この言葉をメモに書いて手渡すと、満足そうな表情を浮かべていたのが印象的です。

今の若者は海外へ出て交流する機会が多い。相手の文化をどう受け止め、取り入れていくかという異文化交流は国際社会の中でますます重要になります。

政治や経済の交流に比べ、言語や宗教などを通じた交流は相手への理解を深める半面、お互いの価値観が直接ぶつかるため、つまずいたり、摩擦を生じたりすることもあるでしょう。この言葉を糧にして乗り越え、もう一歩先に進んでほしいですね。